

追悼 長門谷洋治先生



長門谷洋治先生
(平成11年 東京で)

長門谷洋治先生のご逝去を悼む

小曾戸 洋

本学会の理事を長年務め、関西の重鎮として多大な貢献を果たされた長門谷洋治先生が、平成26年7月11日永眠なさいました。一方ならずお世話になった後学として心から哀悼の意を表します。

長門谷先生は昭和8年2月14日に大阪にお生まれになりました。昭和32年、和歌山県立医科大学を卒業。翌33年、大阪市の日本生命済生会付属日生病院皮膚科に勤務されました。

日本医史学会への入会は古く、昭和38年、30歳のときでした。同43年には早くも評議員に就任。同51年には理事となり、26年の長きにわたっ

て学会の職務に尽力されましたが、平成13年突如病に倒れられ、翌14年から12年間、名誉会員となられました。昭和56年7月には大阪府豊中市に長門谷皮膚科を開業されました。主な研究テーマは、皮膚科学史、医学・看護史で、これらに関する著書(共著を含む)・論説を少なからず遺されました。

私事に及びます。先生は大先輩ではありますが、御面識を得たのは35年ほど前になりました。しかしとくに親密にいただいたのは平成6年頃からのことです。当時先生が共著者として執筆されていた『皮膚科の病名由来ア・ラ・カル

ト』(協和企画通信・1994～96)の資料を提供したことがきっかけだったと思います。先生はお酒は嗜まれなかったようですが、大阪人の中でもとりわけユーモアに豊んだかたでした。お葉書・お手紙をたくさん頂戴しました。私と違って進歩的で、すべて必ず横書きでした。私の所属宛名が「北里研究所東洋医学総合研究所医史学[・]研究部」でしたから、「あんたがたはよっぽど研究がお好きですなあ」と皮肉られたものです。ビール券やビール詰合わせなど「貰い物ですので棄てて下さい」といって毎度送って下さいました。お仰せに従って喜んでお腹の中に棄てたことです。三木榮先生旧蔵の貴重な高麗版『大蔵経目録』を、「私には猫に小判です」といって惜しげもなく贈与して下さいました。

一番のご恩は、当時武田科学振興財団杏雨書屋の運営委員長であった芝哲夫先生に、私を運営委員に推薦して下さいましたことです。杏雨書屋の運営委員は全員関西在住の先生が勤めるのが前例でした。破格のご高情を賜りました。生涯感謝の念に耐えられません。

先生からのお便りは、平成16年9月20日日付の葉書が最後でした。病に臥せられているにもかかわらず、しっかりした内容で、大塚恭男先生、芝哲夫先生のことなどに心遣いされたものでした。その後、私からももっとお見舞いのお手紙を差し上げるべきでしたが、失礼のまま終わってしまったこと、今さらながら悔やまれてなりません。

長門谷先生。ほんとうにありがとうございます。衷心ご冥福をお祈り申し上げます。

巨星また落ち関西の医史学は暗夜行路に

田中 祐尾

「宿痾の望診日々に疎まし」とは中国古医の戒言ですが、宿痾は長期の病、望診は視診を意味し、「長患いの病者への注意はつつい疎かになる」という戒めです。当会名誉支部長長門谷洋治先生は去る七月十一日、奥様の言によると「あっと云う間に逝ってしまいました」とのこと。「日々に疎まし」だったのは関西支部をお預かりする私事務局長であります。ご逝去の報に接したのは随分遅れてから、茫然自失為すすべ知らずでありました。

十三年間の看病生活の辛苦は察して余りあり、何故もう少しお見舞いを重ねなかったのかと慙愧に耐えず、悔しき限りです。ほぼ誰にも知らせず密葬を済ませ今は静かに余生を送りたくあれこれと立ち入ってほしくないという意味のおことばに接し、支部からの献花(供花券)を受け容れていただくのが精いっぱいでありました。

顧みますに、長門谷先生と私との具体的な会

の関わりは平成十年頃だったと思います。当時春秋二回開催し続けていた関西支部例会学術集会の会場を京都でばかりお世話になっていた成り行きに、今は無き杉立義一先生が「久しぶりに大阪で会場を探してみたい」「予算が乏しいのでそこを何とか」と長門谷先生の仲立ちで私にアプローチされたのが初めだったと思います。私は当時大阪市大医学部同窓会の卒後教育に関わっていましたので、医学部長らに会って教育の一環という名分で同校の学舎を無料で貸してもらうことに成功しました。その後京都と交互に、現在なお定期的に開催するという実績を積んでいます。当時の医史学会本部は大阪での総会が中野操先生以後久しく開かれていないので、近い将来大阪でどうかという意向の在ることを知り、医学部長やできれば市長(同医学部出身)にも顔を繋いでおこうと画策し始めたのもこのころでした。支部学会の開催日には医学部長に挨拶してもらったり、当時